

(4) サラベツ川

サラベツ川下流では、養魚のための水利用があるが、優先整備区間において水利用はない。

河川環境として、更別橋(国道236号)から帯広・広尾自動車道までの区間は畑地が広がっている。河床勾配は1/150程度であり、礫河床を呈している。

植物ではヤナギ類の河畔林が形成され、水際はヨシ、ミゾソバ、アキタブキ、エゾイラクサ、オオイタドリがみられる。鳥類では、住宅地や農耕地に生息するヒヨドリやカワラヒワ、ハシブトガラ、キジバトのほか、水域ではカルガモなどが生息している。哺乳類では、キタキツネなどが生息している。魚類については、優先整備区間においては生息が確認されなかったが、隣接するサッチャルベツ川においては、スナヤツメ北方種やイバラトミヨ(トミヨ属淡水型)、フクドジョウなどが生息している。

水質については、サラベツ川は公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定がされていないため、定期的な水質調査はされていないが、令和元年度に帯広・広尾自動車道下流(第11号橋梁)で水質調査が実施された。

調査結果によると、BOD(生物化学的酸素要求量)の最大値は10mg/l以上を示し、E類型(基準値10mg/l以下)の基準を満たさない程の水質である。

このような現状を踏まえ、地域住民や関係機関と連携を図りながら、河岸植生・河床形状の回復や水質の改善等により、多様な河川環境を創出する必要がある。



▲第11号橋梁より下流(上流部)



▲更別橋より上流(下流部)

(5) サッチャルベツ川

サッチャルベツ川は渇水期になると水枯れになる特徴を持っており、現在のところ河川の水利用はない。

河川空間の利用としては平成17年に完成した「福祉の里」があり、緩傾斜護岸によって水辺に近づきやすい親水空間が整備されている。

河川環境として、第2南サラベツ川合流点から丘陵地までの上流部は、周辺に耕作地が形成されている。河床勾配は1/400程度であり、河床は砂礫で構成されている。また、河道内には落差工が設置されている。魚類では、緩やかな流れを利用するスナヤツメ北方種やイバラトミヨ（トミヨ属淡水型）、石礫底の瀬などを利用するフクドジョウなどが生息している。植物では、ヤナギ類が広く分布し、ハルニレやヤチダモもみられる。林床はクサヨシ群落が広範囲に分布し、水際にはノダイオウ、ホソバドジョウツナギ、河岸から背後地にはカラフトイバラやチドリケマンなどが多数分布する。鳥類では、原野に生息するアオジやベニマシコ、森林に生息するウグイスやヤブサメなどの鳥類が生息しているほか、マガモなど水辺の鳥も確認されている。両生類では、河道内周辺や湿地にエゾアカガエルが生息している。

更新橋から第2南サラベツ川合流点までの中流部は、周辺に耕作地や市街地が形成されている。河床勾配は1/130～1/150程度であり、上流と同様に河床は砂礫で構成されている。魚類では、緩やかな流れを利用するスナヤツメ北方種やイバラトミヨ（トミヨ属淡水型）、石礫底の瀬などを利用するフクドジョウなどが生息している。

植物では、草地在河川沿いに連続して分布しており、カラマツ植林が部分的に隣接している。水際にはノダイオウやホソバドジョウツナギが生育している。鳥類では、原野に生息するアオジやカラヒワのほか、水辺に生息するカワセミが確認されている。

猿別川合流点から更新橋までの下流部は、周辺に牧草地が形成されている。河床勾配は1/150～1/170であり、河床は礫主体で構成されている。魚類では、石礫底の瀬などを利用するハナカジカやフクドジョウなどが生息している。植物では、中流部と同様に草地在河川沿いにみられ、部分的にヤナギ林が分布している。鳥類では原野に生息するチュウヒやオオジシギのほか、河畔にはアオジなどが生息している。



▲更新橋より上流（上流部）



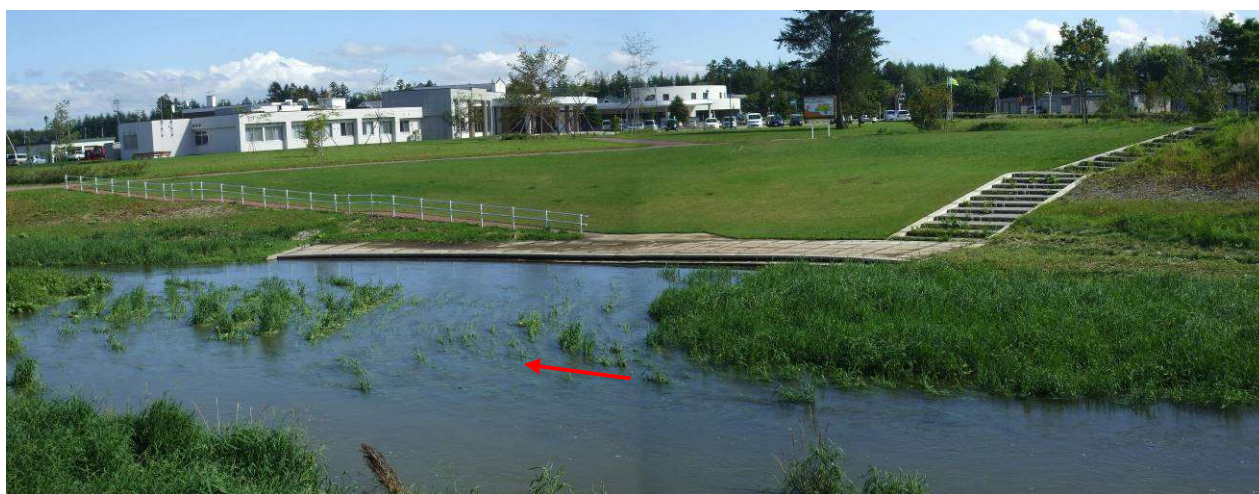
▲更別橋より上流（中流部）



▲勢望橋より下流（下流部）

水質については、サッチャルベツ川は公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定がされていないため、定期的な水質調査はされていないが、平成 25 年度に東 5 号通りが交差するボックスカルバート付近及び更南橋において水質調査が実施された。調査結果によると、BOD（生物化学的酸素要求量）の測定値は東 5 号通りが交差するボックスカルバート付近で 0.5mg/l 未満、更南橋で 0.5mg/l 未満となっており、AA 類型（基準値 1mg/l 以下）程度の水質である。

このような現状を踏まえ、地域住民や関係機関と連携を図りながら、川の連続性を確保するとともに、河川環境を保全していく必要がある。



▲サッチャルベツ川に隣接する「福祉の里」と緩傾斜護岸

(6) 古舞川

古舞川では、現在のところ河川の水利用及び水空間の利用はない。

河川環境として、周辺には畑地が広がっており、河床勾配は1/130～1/410程度で、河床は礫主体で構成され、一部は三面張となっている。また、河道内には落差工が設置されている。

植物では一部にヤナギ類の河畔林が形成されている。他は草本類が主体であり、水際にはノダイオウやチドリケマン、アカンカサスゲ等がみられる。鳥類では、住宅地や農耕地に生息するヒヨドリやハシブトガラス、キセキレイのほか、水域にはアオサギが生息している。魚類については、瀬や淵などに生息するサクラマス(ヤマメ)やニジマス、石礫底の瀬などを利用するフクドジョウのほか、一部砂泥の堆積している箇所にはスナヤツメが生息している。

水質については、古舞川は公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定がされていないため、定期的な水質調査はされていないが、令和5年度に稔橋付近、古舞12号橋付近、大山橋付近で水質調査が実施された。

調査結果によると、BOD(生物化学的酸素要求量)は稔橋付近で0.7mg/l、古舞12号橋付近で0.6mg/l、大山橋付近で0.5mg/l未満となっており、AA類型(基準値1mg/l以下)程度の水質である。

このような現状を踏まえ、地域住民や関係機関と連携を図りながら、河川環境を保全していく必要がある。



▲大山橋より下流の河道状況(上流部)



▲古舞12号橋より上流(中流部)



▲稔橋より上流の河道状況(下流部)